

## 甘いもの屋でよかった話

吉田 菊次郎  
(株式会社ブルミッシュ)  
代表取締役社長



筆者、(株)ブルミッシュなるささやかな甘いもの屋を営んでいる。数ある中でもこの業態はサービス業の持つ特性ゆえか、3Kだのブラックだのと言われかねないところがないでもない。よく人様から「吉田さん、なんでお菓子屋なんかになったの」といわれる。なんかにとはご無体なとも思うが、昔は大体が子は家業を継いだもので、我が家は両親ともが菓子屋の家系であった。よってハナから特段の志があったわけでもない。只、神様はいささか起伏に富んだ筋書きをご用意くださっていたようで、学生時代に家業が傾き程なく倒産。再起を図っての渡仏修業後お家再興と、世間によくある話の典型のような人生を歩むことになる。そしてその後も、まま人並みの曲折を経つつ、ひたすら生業に励んできた。

そうしたある日、身の辺の些事どころではない、千年に一度という大災害が日本を襲った。平成23年(2011年)3月11日の東日本大震災である。直後に農水省から被災地支援のご要請が入った。まずはカップ麺とかおにぎり、パンといったものが必要だが、これについてはすでに手配中。緊急は水。受けた私はすぐに親しい間柄のサントリーさんに連絡をとった。「すでにペットボトル百万本用意しています」とのお返事。さすがは日本を代表する企業と敬服。次にこれは長引くとして、「缶詰等調理を必要としない食品を五十万食用意できますか」との問いかけを頂く。すぐさまこれも親しい明治屋さん等に繋ぐ。続いて農水省から「今度はお菓子の出番ですが、宜しく…」のオファー。平成7年(1995年)の阪神淡路大震災の経験から、「人は一拍置くと甘い物がほしくなるもの。またそうしたものが口に入ると心が落ち着く」ことなどが実証済み。まさしくお菓子の持つレゾナントである。同震災時同様、言われるまでもなく流通在庫も含め、日持ちのするお菓子を百二万個までキープ。国家の一大事なればと会社を挙げて支援体制を整え、次の指示を待つ。と、そこへ首相官邸に居られる方からのお話が入る。災害対策本部が置かれているそこも不眠不休の戦いが続いており、つまむお菓子もないという。ならば、とご連絡の上、車一杯にお菓子を積んで伺った。担当者の方の指示に従って運び込んだはいいが、別室から戻った同氏いわく「実にありがたいことなのですが、今この時間に現地で悲惨を極めている方がたくさんおられるのに、自分達だけがこのようなものを口にするわけには参りません。一度お願いしたものではありませんが、この度はご厚意だけを頂戴して

…。農水省等各省内同様、「日本はひとつ」を合言葉に身を粉にしておられるが故のご判断らしい。さりとて、そうですかと持ち帰るわけにも行かない。「分かりました。では私、ここに忘れてまいります。どうぞ如何様にもご処分なさってくださいまし」と丁重にお返事申し上げその場を辞した。一瞬お困りになったお顔をされたが、深々頭をお下げになられた。おそらくはよしなに処分していただけたものと思う。

さて、程なく東北自動車道の通行可能を確認後、直ちに本格的な支援活動に移った。農水省と現地対策本部の要請を併せ受け、度毎に車にお菓子を満載し被災地に向かう。最初に訪れた宮城県女川第二小学校には何と二千五百人が避難していると言う。つい先日まで何事もなく暮らしていた人たちが、一杯の雑炊を求めてヨレヨレの服で並ぶ。突如孤児にされた子供たちが無邪気を装い遊んでいる。この高台の学校にいたから助かったが、すぐ下の家にいたご家族は全員が流された由。大勢の人たちに囲まれている今は気も紛れようが、いずれ皆散って一人になった時、彼ら彼女らは何を思うか。この先のこの子供たちの人生を思うと心が塞ぐ。悪魔の爪跡と化した瓦礫の中では、何人もの人に混じって自衛隊員が必死で何かを探している。ご遺体探しのお手伝いとか。思わず手を合わせる。石巻でも荷を運び込むや、「エッこれお菓子ですか？開けてもいいですか？」、「あっホント、お菓子だあ！」そのひと声で体育館中が瞬時に明るくなる。お菓子屋をやってきて良かったと思える瞬間だ。東松島や会津美里町等の避難所またしかり。一片のスイーツの持つ力の大きさに改めて驚く。仙台の同業者がこんな事を言った。「今、友達の葬儀から帰ってきたんだけど、その彼がさあ、『津波だあ』ってんで一度は逃げたんだけど、何を思ったか家ん中に取り返して、そのまま吞まれちゃって…で、上がった遺体のポケットからたくさんの乾電池が出てきたんだって。いろんなこと考えたんだろうね、とっさにさあ」。言葉を失う。人それぞれとはいえ、その瞬間私たちは何を思うだろうか。その言葉が耳から離れぬまま、翌日いわきの避難所に向かう。そこにも大勢の人たちが身を寄せ合っている。一過性の津波とは異なる、果てしなく続くだろう目に見えぬ敵と戦いながら。

千年に一度といわれる災いは、私達の現代社会にあまりにも大きな傷跡を残していった。その後も、例えば記憶に新しい、平成28年（2016年）の熊本地震の際にも、いくばくかのお手伝いをさせて頂いた。あの折も支援の体勢をとっていたのだが、一向に指示が降りてこない。官が動けなければ、民が自主的に動けばいい。昵懇の間柄の地元の菓子店も罹災し、営業活動もままならぬという。早速ご当主に連絡を取り、支援のスイーツをお送り申し上げた。そしてそれを“今こそ地域社会に貢献すべき時”と燃えている同社スタッフのお力を借りて、各駐車場等に張られたブルーテントに避難されている方々にお配りさせて頂いた。そういえば、フィリピンの大津波の折にもスタンバイしていたが、この時はペンディングになってしまった。実際に被災者の元に届くかどうか分からないとして、待ったが掛かったのだ。後から思うに、それを見越してでも送って差し上げた方が良くはなかったか。今にしてなお、忸怩たる思いが残っている。

大企業ほどではないにしても、それぞれの立場において、微力なりとも世の中のお役に立たんとしているところも少なくない。そんなあまたの中小企業にも、金融機関をはじめ皆様方の深いご理解と手厚いご加護を望んでやまない。